

「副業」としての部活動
英語教師が英語教師であるために

青木栄一

Aoki Eiichi
(東北大学准教授)

副業が本業にならないように

部活動に力を入れたいというのが教職を志す教員だった英語教師もいるかもしれない。ただ、素朴に考えて、教師の本分は授業であって部活動顧問は「副業」でしかない。ところが地域社会からの期待やら教師本人の「熱意」やらが絡み合って、部活動がエスカレートすることがままある。いわば自らの「王国」を教室以外に創ることができるため、「熱意」がある教師にとっては好ましい状況だろう。しかし、これは副業が本業となる困った状態である。他方、不本意ながら地域ぐるみで加熱した部活動指導に従事せざるをえない教師にとっては生き地獄である。そもそも、部活動指導時間が長い教師の教科指導時間（授業準備、正規の授業時間以外の学習指導、成績処理）は、部活動指導時間が短い教師のそれと比較して短いという分析結果もある（小入羽 2011, 187-189頁）。児童生徒の目は意外に鋭い。授業（準備）を手抜きする教師の指導は児童生徒に伝わらない。

筆者が関わった文部科学省「平成28（2016）年度教員勤務実態調査」では部活動業務が中学校教師の負担となっていることが明らかになった。平日は部活動に41分（平成18（2006）年度は34分）費やしている（顧問をしていない教諭も含めた平均値）。これは授業（3時間26分）、授業準備（1時間26分）、生徒指導（集団）（1時間2分）に次いで長く、学年・学級経営（38分）、朝の業務（37分）よりも長い。深刻なのは土日である。なんと2時間10分（平成18年度は1時間6分）も部活動指導に従事している。これは土日でも最も長い業務である。次の

で授業準備（13分）、成績処理（13分）、学校行事（12分）と比較するものもおかしなくらい、部活動指導が土日業務に「蔓延」している。10年前と比較して土日の部活動指導が「倍増」した背景には、土日の部活動指導をしない（「0時間」）教師が減り、長時間従事する教師が増加したことがある。これが1つの契機となり、スポーツ庁では運動部活動の在り方について検討する会議体が設置されガイドラインが策定された（2018年3月）。文化庁活動についても文化庁で同様の検討が開始された（2018年7月）。

部活動指導とメンタルヘルス

平成28年度教員勤務実態調査の分析に当たった研究チームには精神科医のグループが参画し、メンタルヘルスの観点から労働時間データを分析した。部活動に関しては、次の2つの知見が得られた。1つ目は、部活動指導日数とメンタルヘルスとの間に相関関係はみられないということである。2つ目は、部活動指導に必要な技能を備えていないとメンタルヘルスは不良である傾向が見受けられるということである。特に、男性にその傾向が強い。2つ目の知見について深刻に受け止める必要がある。まずは部活動指導員の配置を進め、未経験の部活動顧問の心理的負担を軽減する必要がある。

総じて、土日（あるいは長期休業中）の部活動指導への長時間従事は、（英語）教師の自己研鑽の好機を奪っているといえる（前回本連載参照）。由々しき事態である。

◆参考資料

- 小入羽秀敬（2011）「教員の業務負担と学校組織開発に関する分析—部活動に着目して」『国立教育政策研究所紀要』第140集，181-193頁
- 八田誠・小入羽秀敬・平井康仁（2017）「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議発表資料」
- 文部科学省（2017a）「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について」
- 文部科学省（2017b）「平成29年度『運動部活動等に関する実態調査集計状況』」